
「自分を見つめてみる」の会

メネ@未確認

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「自分を見つめてみる」の会

【Zマーク】

Z3033V

【作者名】

メネ@未確認

【あらすじ】

自分を蔑んでみるの念。自分語り恥ずかしいです。
という隨筆のようななにか。

なぜ小生は小説を書くのか（前書き）

推敲をまつたくしてこませんので、田に余る文章だとは思いますが、
「」を承ください。

↖ ↘ ↙ ↘ メネ

なぜ小生は小説を書くのか

『第一号議案：なぜ小生は小説を書くのか？』

*自分の作品を小説と定義するのはおこがましいにも程があるのだが、便宜上、以降の議案でも「小説」と表記する。

なぜ自分は小説を書き始めたのであろうか。

このような趣味を持たなければ、もしかすると今のよつに捻くれた性格にはならなかつたのかもしない。

馬鹿である。否、阿呆者で痴呆者である。

この問題を解くには、まず、某同人ゲームについて語りねばなるまい。これを語りずして、一体なにを語るのであろうか。

この某ゲーム、といつのは、「ひぐらしのなく頃に」というもの。正しく表記するならば、「ひぐらしのなく頃に」祭だ。P S 2 版のものである。

某年某月、姉と共にゲーム店を訪れた際、姉がこのゲームのチラシを手に取った。

これが、惨劇の始まりだ。もし姉がこれを取らなかつたら、もしくは自分に見せなかつたなら、今こりしてこのような駄文を書き晒すようなことは無かつたであろうに。

一応言つておくが、姉を恨んではいない。恨んでいるのは、その日そのチラシに興味を持った自分である。馬鹿である。阿呆の極み、痴れ者の代表である。

やうして「ひぐらし」に興味を示した自分は、まずウイキを眺めた。

そして知つたかぶつた。中身をプレイする」となく、「ひぐらし」を極めたと自惚れたのだ。

自惚れた自分は、次に「こう考へた。「オヤシロ様が**となつたら、きっと面白いであろう」と。ああ、なんという浅はかな考えを持つたのだ。

しかしその頃の自分は、「我輩は特別であるからして魔法を使える、そして何でもできる」などと中一病真つ盛りであつたから（今も兆候はあるが）、その考へが馬鹿者のそれであるとは何も思わなかつた。

せりに陰氣が災いを呼び、あらうじとか一次創作小説サイト（「にじふあん」ではない）を見つけてしまつた。

惨劇の暴発である。もしあのサイトを見つけなければ……いや、もう語るまい。

それから馬鹿で阿呆で痴呆の自分は、誰の眼にも「駄文だ」と映る小説とも呼べない何かを投稿し始めた。

途中、荒らしに絡まれた。そこでやめておいたら、と思つ。

途中、初めてのエラーなる（放棄）を行つた。そこで終わつていれば、と思う。

途中、感想が付いた。それに狂喜乱舞していなければ、と思つ。

途中、批評を頂いた。その批評は素晴らしいものであつた、と今でも思つ。

自らの文章を読み返して泣いた。上手く書けない自分を悔やんだ。そして上達したいと考へた。またも惨劇の始まりである。

しかしその「上達したい」が、今の自分を支えているのだ。

「上達したい」という目線から有名作家などの小説を読むと、どうなく面白く。ああこんな表現もあるのか、このセリフ回しは最高だ、と考えるようになる。面白い。

「上達したい」という一心で書いた作品に感想をもらうと、ちよつだけ前進できた、と思つ。それからまた、さらに上手くなるうと感えるようになる。

「上達したい」という考え方で小説を書い、何よりも楽しい。よつしょじを工夫しよう、この表現は良かったな、と自分を褒めたくなることもある。最近は、ゲームと同列の趣味だ。

まあつまり、よく分からぬ文章を連ねておいて、なんだが。要は「上達したい」から小説を書くのだ。

初めからこの一文で済むのなら、これだけで良かつただろう。しかし何も考えずに文章を書くのも新鮮な気分である。

本当に、「自分を見つめてみる」よつな気もする。「見つめてみる」よつは「覗んでみる」といつのもあながち間違いでないような気もある。

まあ、じつでもいい。

『第一号議案・結論・「上達したい」から』

小生よ、貴様のキャラは基地外ではないのか（前書き）

例のとおり、推敲はしていません。
もしお見苦しそうでしたら「報告ください」。出来づらの限り直して
みます。

↖ ↘ ↙ ↘ メネ

小生よ、貴様のキャラは基地外ではないのか

『第一号議案・小生よ、貴様のキャラは基地外ではないのか?』

*「基地外」は、「キチガイ」を示すネットスラングのこと。そのまま表記すると、どうも本物と勘違いされそうであるからして便宜上「基地外」と表す。

さてはて、一號議案はこのよつなものである。

またも「襲んでみる」余になつてゐるようではあるものの、いやしかし自分に鞭打つところの中々画期的である。

そう思案した自分は「この度」のよつな議案を提出した次第である。

まあ何を語るつとも、その前にまずは血らのキャラクターを眺めてみようではないか。

「この恥ずかしい限りであるが、やはり自分に鞭を向けるのもまた滑稽である。

さて、手前用いだしたるは「一次創作」だ。前回の議案にて、自分が小説を書く理由に「一次創作を挙げたが、なにを隠そう第一作目にはオリジナルキャラクターが入つていたのだ。

暗黒期（黒歴史の創造と共に始まるとされる暦）の一年目に生み出された、「*****」というキャラクター（名前を表記するのも羞恥に耐えられないため、恐縮ではあるが伏字とさせさせていただく）について紐解いてみよう。

「*****」は、原作に出るあるキャラの双子といつ設定であつた。神様とキャラを足して一で割つたキャラ、というなんとも言えないほどの設定である。ああ、中一病万歳。殺して吊るして薪の代わりに火にくべてやるうか。

ところで自分は「グロ好き」と自称しているのだが（ただしホラ

ーは苦手。グローホラー)、その嗜好はこの頃より現れたらしく、あわれ「＊＊＊＊」は一人目の犠牲者である。

「＊＊＊＊」は、人殺しであった。自分としては特に恨みは無かつたのだが、原作キャラを次々に殺していくという暴挙に出た挙句、自分は生き残つて勝手に自殺するという始末。もう手が付けられぬ。口にもできぬ。

ちなみに、殺人の描写は案外面白かった。

さて、まだまだ取り出したままの「一次創作」。自分は今現在「水奈酉紫恵の観殺日記」を連載（とは名ばかりで一旦放棄中）しているのだが、この「水奈酉紫恵」も「一次創作」から生まれたものである（昔は「酉紫恵」ではあったが）。

彼女は「殺人大好き」で「ミステリアス」な設定である。ミステリアスというか推理ミステリーを生みだそうとするかのような彼女だが、まあ一応過去がうんたらかんたら。

というかこれについてはわざわざ腹を開かずとも、すでに「殺人好き」という点で常人とはかけ離れている。勿論これも中二病の産物「普通の人とは違う特別な存在」を作りたがるところからきている。ちなみに彼女、二次創作の方ではよくよく自殺をしていた。あと幽霊になつてたこともある。もはや神様。アホかお前と過去の自分をののしりたい。

ちなみに、殺人の描写は結構面白かった。

さて次に、「なろう」に投稿した作品から変なキャラクターを抜き出してみよう。

とりあえず目立つのは、「ハイテンションな鬱病患者」（今はただの躁病やんけと思う）だろうか。もうこれは普通に気が狂つてやがると誰もが考えるだろう。実際作者自身そう考えた。毎日屋上に通つて意味不明な単語の羅列を叫んだ拳句の果てに勝手に飛び降りするという素晴らしい行動。なんじゃそりや。

しかも、最後にある同級生の会話も結構ひどい。知人が即死したという知らせを聞いて発した言葉はたったの二文字と長音一つだけである。しかもプリンの方が話題として盛り上がっているのだ。あの二人は本当に人間なのだろうか。

ちなみに、血が太陽光で煌めくのは普通に綺麗だと思つた。

他にも「くります」に出る「ーーです」とか、「ある馬鹿」の「二人」とか、「茶飲み友達」の「僕」とか、訳が分からぬよと叫びたくなるほどの妙なキャラクターばかりではないか。なんだこれは。しかも人が死ぬやつばかりである。

よく考えると、人が死なないのはお題小説と「ある馬鹿」だけだ。なぜ自分のキャラがよく死ぬのか、と問われれば……いや、まあこれは次の議題にでもしよう。あまりに大きく膨らんでは、きつとうちや「じゅう」としてしまうから。

ちなみに、自分のキャラの最期を書くのは凄く楽しい。

さて

ここまでをすらすらと書き連ねて、思つたことが一つある。

よく、「作者より頭のいいキャラは作れない」と言われるだろ。故に天才キャラは扱いが難しい、とも言う。というか作らない方が吉とも某所では語られていた、ような気がする。

これはつまり、「作者は自分より基地外なキャラは作れない」ということではないだろうか。実際基地外な思考回路は作者自身が理解できないと書けないはずだ。天才の思考しかり、基地外の思考も常人には理解できないのだ。

ということは、である。

基地外なのはキャラではなく、作者ではないだろうか？　いや、いや、もちろん全面的に認めてはなんかこうアレな気もするが、意外とそのではと考えたのだ。つーかこのレベルで物書き（ただしカツコワライを含む）を宣言してるあたりから、容易に想像でき

る。

色々と議論が必要と思われるかもしねないが、その辺の真偽や審議は「これを見ている皆様にお任せするとして、いつたんこ」で結論に入らうではないか。

ええと お約束のセリフとして、こう締めよう。戦隊モノや魔女つ娘モノがよく売れるのは、決め台詞があるからとも聞く。自分もそれに倣つてみようかと考えた次第だ。
まあ、どうでもいい。

『第一回議案・結論・作者が基地外だからしょうがない』

追記として、やはりこれは「戻んでみる」に改題した方が良いのではと思ひ。
これも、割とどうでもいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033v/>

「自分を見つめてみる」の会

2011年10月8日06時43分発行